

■ 市場の価格変動メカニズムは徐々に正常化！？

今週21日、トランプ米大統領がイランとの停戦期間を「協議が終了するまで」延長すると表明した。期限を示さず延長したということは、当分の間、先行き不透明な状態が続くということになる。

むろん、事前にトランプ氏がちらつかせていた大規模攻撃が避けられたこと自体はせめてもの救いと言える。しかし、今後もイラン港湾の封鎖措置は続けるとしており、たとえ停戦期間を延長したところで、暫くは原油価格の高止まり状態が解消されないものと見られる。結果、世界経済への悪影響が続くことは大いに懸念されるところである。

執筆時点におけるNY原油先物相場は比較的落ち着いた状態にあるものの、米・イラン双方が譲歩しないまま停戦期間が続けば、再び一段の上値を試しに行く可能性は十分にある。

ガソリン価格の上昇で米国民の不満が強まり続けるなか、トランプ氏としても極力早期に戦闘終結に持ち込みたいのはやまやまでであろう。もはや、本格的なレジャーシーズンへの突入が目前という状況にあって、そろそろ軍事行動を終える必要があることは確かである。

5月14～15日には米中首脳会談も控える。イラン産原油に多くを頼る中国としても、混乱が長引けば会談の日程を再延期せざるを得なくなる。そもそも、中国は戦闘終結後のイランとの関係強化を強く欲していると一部に伝わる。果たして、米中首脳会談は予定通りに行われ、それが一つのデッドラインになると考えていいものだろうか。

そんななか、米国では原油先物取引等におけるインサイダー取引疑惑までもが噴出しており、すでに米当局も調査を始めたとされる。トランプ氏によるSNSへの投稿が行われる前に売買高が“不自然に”急増した事例が確認されており、その原因を「アルゴリズム取引による」とする声もあるようだが、一部の専門家は「人間によるもの」であるとしている。

兎にも角にも、実に様々な事柄が非常識、不見識、不道德と思われる方向に進んでおり、そんな状況下で理路整然とFXトレードに向き合うことは必ずしも容易なことではない。

ただ、もはや中東有事絡みのニュースに市場は食傷気味となっており、その内容に対する反応も徐々に弱まっていることは確か。ことに、トランプ米大統領の発言や投稿の内容に対しては、あえて無視しておこうというムードさえ広がり始めている。ゆえに、市場の価格変動メカニズムは徐々に正常化し始めているとも言えよう。

まずドル/円については、やはり160円処に強い介入警戒があり、依然として159円台後半からの上値は非常に重い。こうした状況下では、160円処を上方ブレイクされた場合に備えたストップロスを置いたうえで、160円手前当たりの水準で戻り売りを仕掛けるのが基本となろう。

周知のとおり、今週21日に日経電子版が「日銀、4月利上げ見送りへ」との“特報”を伝えた。市場はある程度織り込んでいたものの、この一報を受けてドル/円が再び159円台にしっかりと乗せる動きとなったことは事実である。とはいえ、その後の高値は159.69円処までに留まっており、ひとまず「日銀の4月利上げ見送り」は市場で消化済みと見ていいだろう。

もちろん、来週の日銀金融政策決定会合の結果、その後の総裁会見の内容が伝わったところで、それを理由に極端な円安に振れる可能性は低いと見られる。よって、ドル/円の159円台後半の水準は打診的にショートを振っておくとして、その時の下値の目安はというと一つに158円処から、より慎重に行って158.60円処ということになると個人的には考える。

一方、ユーロ/ドルについては基本的に押し目買い方向で好機を狙いたいところ。

右図に見る通り、3月13日安値から4月17日高値までの上げに対する38.2%押しの水準=1.1680ドル処、あるいは21日移動平均線（21日線）が位置するところ（現在は1.1654ドル処）が当面のエントリーポイントとして有効と見る。

（04月23日 09:50）

